総合政策　第 17 巻第 2 号（2016）pp. 177−196
Journal of Policy Studies

宮沢賢治「シグナルとシグナレス」の三重の寓意
── 岩手軽便鉄道国有化問題と有島武郎の恋と天球の音楽と ──

米地　文夫*

要　　旨　宮沢賢治の短編「シグナルとシグナレス」は、従来、幻想的童話とみられていたが、実は地域の話題を寓話化した大人向けの物語であった。その話題の一つは、私鉄の岩手軽便鉄道（ほぼ現 JR 釜石線）を国有化させ、国鉄（現 JR）東北本線に繋ぎたいという運動をモデルにし、愛しているが離れて立つシグナレス（岩手軽便鉄道）と本線シグナルとの恋を描いた。第二の寓意は有島武郎と河野信子との恋愛で、有島武郎は新渡戸稲造の姪の信子を愛するが、鉄道の国有化に大きな影響力を持つ父有島武は、産婆の娘信子を身分違いとして結婚に反対し、新渡戸家の郷里花巻の人々の憤激を買ったことを物語化している。第三の寓意はピタゴラス派の諧音の示す天空の妙なる調和である。地上の葛藤や矛盾の多い世界と異なり、天上には美しい和の調べがあり、それが天球の音楽として、恋人たちを感動させるのである。すなわち、天：天球の音楽が示す美しい調和、地：地域社会の軽便鉄道国有化運動、人：有島武郎と河野信子の実らぬ恋、の三つの寓意がこめられた作品である。

キーワード　宮沢賢治「シグナルとシグナレス」、岩手軽便鉄道、東北本線、有島武郎、ピタゴラス派の天球の音楽

Ⅰ　はじめに
──「シグナルとシグナレス」の特異性 ──

『岩手毎日新聞』紙上に 1923（大正 12）年 5 月 11 日から 23 日まで断続的に掲載された宮沢賢治の作品「シグナルとシグナレス」は、「若さま」と呼ばれている本線シグナルと、離れて立っている軽便鉄道のシグナレスとの恋の物語である。女性形につける -ess は、princess や lioness など多くの例があるが、もちろんシグナレスは賢治の造語である。

シグナルたちは立つ位置が固定されていて動けないことや、信号は腕木と燈火ですること、などシグナルの構造や機能をそのまま残している。しかし擬人化されているので、二本ではなく二人と呼ぼう。

二人のシグナル、すなわちシグナルとシグナレスは結婚を誓うが、身分が違うと反対する鉄道長の意を受けて本線シグナルつきの電信柱が、それを諦めさせようとする。二人は夢の中では天空の海辺に寄り添って立つが、夢から醒めると、前と同じに二人は離れて立っていた、という物語である。

この「シグナルとシグナレス」は分かりやすい、愛すべき作品とみられがちで、先行研究が比較的少なく、従来は小倉（1964）の「可憐な美しい幻想的な小品」という評のように捉えられてきた。

しかしながら、この作品は宮沢賢治の創った数多い物語の中で、最も異質なものの一つで、次のような特異点を持つ問題の多い作品である。

その第一点は、登場するキャラクターが全て命なき物であることである。賢治の他の童話は人間、

* ハーナムキヤ景観研究所　〒 025-0063 岩手県花巻市下小舟渡 237-3

動物、植物など生き物のいずれかが登場し会話をする。たとえば、非生物ばかりが登場するように見える「気のいい火山弾」でも後の方で人間の地質学者たちが登場し会話する。ところが「シグナルとシグナレス」の場合は人間も動植物も出てこない。

これは実は岩手軽便鉄道を国有化させたい、という、当時の花巻の人々の願いを物語にしたからである。鉄道対鉄道の問題であるから、それを象徴するものとして両鉄道のシグナルの間の物語にしたのである。すなわち本線のシグナルと軽便鉄道のシグナレスとが結ばれるように、という形で両鉄道の合体という地域の願いが寓意されているのである。

第二点は、全編、恋愛の物語であることが挙げられる。この物語は、普通は童話と分類されてはいるものの、幼い慕情が描かれているなどというものではなく、本格的な大人の恋物語なので、結局、少年少女期の終りのころの読者にふさわしい、という続橋(1957)のような捉え方になってしまっていた。

しかし、内容は「結婚の約束をしてください」とか、春になったら「結婚の式をあげませう」という会話のある大人の恋なのである。しかし身分の違いを理由に、二人の恋はなかなか実りそうもない。したがって「シグナルとシグナレス」は、恋愛結婚が少数派で、結婚は家と家との問題と考えられがちだったその当時にあっては、大人に読んでもらう物語であったのである。

特に、花巻の消息通の人々にとっては、この作品を読めば、花巻に関係深い著名人の間の、身分が違うという理由で恋が実らなかった例が思い当たるはずであった。それは有島武郎と河野信子との恋で、国鉄に大きな影響力のある武郎の父武が猛反対した。相手の娘は新渡戸稲造の姉河野喜佐との母子家庭で質素に暮らす長女信子であった。

武は上流家庭の有島家に対し、河野家は身分が違い、つりあわぬといい、二人の結婚を許さなかった事件である。

有島武郎の母幸子は旧盛岡藩士の山内家の出であり、河野信子の母も同じく旧盛岡藩士新渡戸家の出で、稲造の姉に当たるので、旧盛岡藩領の人々のなかで話題になったこの出来事を第二の寓意としたのである。

第三点は、結末が曖昧なことである。未完のものを除けば、賢治の物語のほとんどが、最後はきちんと物語が締めくくられる。ところが、この「シグナルとシグナレス」は、夢から醒めたところで終わるので、恋する二人が今後どうなるのかが、わからないまま終わるのである。

夢から醒める物語は他にもあるが、「銀河鉄道の夜」ではジョバンニが新たな道を進むことになり、道に迷った「風の又三郎」の嘉助は皆に助けられる。しかし、「シグナルとシグナレス」の末尾は、「二人は又ほつと小さな息をしました。」と終わり、結婚できるかどうか、恋の行方が不明のまま終わる。

つかの間の天空の幸せな夢は何を意味するのであろうか。もし、二人がみた夢が、ただの夢なら、醒めたあと二人がつくのは失望の溜息となる。

しかし、「シグナルとシグナレス」もまた、「銀河鐵道の夜」の天空の旅の夢が持つ神秘性と同様の性格を帯びた物語である、と私は考える。なぜなら天の軋り、ピタゴラスの諧音などという科学的説明が加わって、天空の壮麗さが描かれているからである。人々は地上のさまざまな出来事に一喜一憂しているが、ときに宇宙の持つ神秘にも触れるべきである、という寓意がこめられている。

すなわち、「シグナルとシグナレス」は地上の地方政治経済的問題、人間の恋愛，天上の神秘に触れる法悦とからなる天地人、三つの寓意を秘めた重層的作品であることを、本稿で明らかにしたい。

Ⅱ　岩手軽便鉄道国有化運動の物語化

1. 岩手軽便鐵道の国有化運動

「シグナルとシグナレス」が書かれたころ、国鉄（現 JR）の東北本線花巻駅は、私鉄岩手軽便鉄道花巻駅のすぐそばにありながら、駅舎が離れていた。東北本線花巻駅のシグナルと軽便鉄道の

シグナレスとの恋人同士も、離れて立っており、なかなか結ばれそうもないのである。（図1・図2参照）

この物語が軽便鉄道の国有化を題材にしたものであることを示唆したのは高橋（1986）であった。岩手軽便鉄道が、1919（大正8）年から国有化を政府に繰り返し陳情していたことを述べ、「金属製で電燈の赤青二組めがねのシグナル（本線）に対し、木製でランプの一つめがねのシグナレス（軽便）。こうした成婚の前にたちはだかる格差をのりこえる恋物語「シグナルとシグナレス」は、背景に本線（国鉄）と軽便（私鉄）との対比が象徴的に浮きぼりになっていた。」と指摘している。

賢治がこの物語を執筆した1923（大正12）年には、地元花巻を中心に岩手軽便鉄道を国鉄路線に昇格させようという運動が特に盛り上がっていた[1)]。なお、この当時、国鉄は省鉄と呼ばれることが多かった。1920（大正9）年設置された鉄道省が直轄する鉄道の意味であり、1949年以降、公社（公共企業体）の運営に変わり、国鉄の名が一般化した。

したがって、この作品が童話らしからぬ恋物語であるのは、大人が読めば、この昇格運動が寓意されていることが、すぐにわかるような話だったのである。この童話が子ども向けの雑誌に掲載されたものではなく、『岩手毎日新聞』に載ったものであることも、それを裏付けているといえよう。

「シグナルとシグナレス」は第一義的には、岩手軽便鉄道の国有化運動を物語化した作品であるという解釈は、すでに略報している（米地、2012）が、その経緯や背景について、本稿であらためて詳述してみる。この間の地域史的経緯については八木（1955）、熊谷（1968）、及川（1983）、深澤（2005）らの著作を参照した。

国鉄東北本線は、前身が日本鉄道奥州線で、1909年に国有化され東北本線の名称となった。一方、私鉄岩手軽便鉄道は1915年11月3日に最後の岩根橋―柏木平間が開通して、花巻―仙人峠間が全通した。また釜石から大橋まではすでに1911年釜石鉱山鉄道が開通しており、中間の徒歩連絡をはさみながらも花巻から釜石までの鉄道連絡が可能になった。

しかし、東北本線花巻駅と岩手軽便鉄道花巻駅とは近接してはいたが、駅舎は別であり、もちろん線路も連結していなかった。先に挙げた第一の特異点はこのような両鉄道の駅施設を擬人化したことによるのである。

一般には1925年に岩手軽便鉄道の取締役であった瀬川弥右衛門が貴族院議員に当選してから、岩手軽便鉄道の国有化などの運動が始められたと言われている。しかし、花巻町民が国有化を望んだのは、それより早く1919年春からであった。

そのきっかけは隣県宮城の仙北軽便鉄道が、同年4月に国有化されたことである。仙北軽便鉄道は岩手軽便鉄道全通の3年前の1912年に小牛田と石巻の間が開業していたが、国有化後、1920年に軌間を東北本線と同じに拡げ、1922年に名称を石巻線に変更した。

花巻は北上川舟運によって石巻とは緊密な関係があった。その石巻と今度は国鉄線によっても結ばれることになったことは花巻の人々にすぐ伝わった。それは花巻にとっても嬉しいことであるとともに、次は岩手軽便鉄道が国有化される番になるはず、と期待が一気に高まったのであった。

この1919年、照井孝介花巻町長は、軽便鉄道国有化運動のため上京中に発病、急逝し、同行した平野勇作助役も病を得て花巻に帰り、まもなく死去した（八木、1951）など運動は苦難続きであった。

ようやく、賢治在世中の1927年に第52回帝国議会で鉄道施設表別表に花巻・釜石間の鉄道が追加されて予定線となり、さらに1929年第56回帝国議会で建設線へ昇格した。つまり、シグナルとシグナレスは婚約したのである。

結局、岩手軽便鉄道の国有化決定と釜石線の発足は、賢治没後3年目の1936年第69回帝国議会で岩手軽便鉄道の国有化が決定され、同年8月1日に国鉄釜石線（東線・西線）となった。花巻・釜石間が全線開通し、軌間も東北本線と同じに拡

がったのは、更に遅れて1950年10月10日であった。残念ながら、賢治は生前、シグナルたちの結婚を見届けることはできなかったのである。

2. 国鉄東北本線と岩手軽便鉄道との恋の物語

「シグナルとシグナレス」の中で、本線シグナルつきの電信柱は、「あゝあ、八年の間、夜ひる寝ないで面倒を見てやつてそのお礼がこれか」と嘆く八年とは、岩手軽便鉄道全通から「シグナルとシグナレス」掲載時までの年数である。

結婚に反対する「鉄道長」という妙な官職は実際にはないが、おそらく鉄道省のもじりでもあるだろう。鉄道省は、この童話連載の3年前、1920年5月に、それまでの内閣鉄道院が昇格して発足していた。その当時、岩手出身の原敬が首相であったが、原自身の地盤との絡みで山田線建設を推進する一方、岩手軽便鉄道の国有化問題に対しては冷淡であり、鉄道省はその意を受け消極的な対応であった。

Ⅲ　有島武・武郎父子と河野信子との物語

1. 恋物語としての「シグナルとシグナレス」

(1) 宮沢賢治自身の恋の物語ではない

この「シグナルとシグナレス」が単に東北本線と岩手軽便鉄道との合併問題だけであれば、もっと単純で可愛らしい童話、たとえば本線機関車と軽便機関車が友達になるなどという話でよいはずであるが、この作品は大人の恋愛物語になっている。

この時期に賢治が岩手毎日新聞に発表した他の二編には童話「やまなし」、童話「氷河鼠の毛皮」と童話の文字を冠しているが、「シグナルとシグナレス」のタイトルには童話という字はない。それは、大人向けの物語だからである。

宮沢賢治はその優れた想像力から物語を自在につむぎだしたように思われがちであるが、実はモデルとなる人物や事件を巧みに脚色して物語の中に溶け込ませている例がほとんどである。

それ故、この物語は賢治自身の恋愛体験を反映したものとする見解が生まれる。小倉(1964)は「賢治が十八、九歳のころの恋のカリカチュアである」という説を唱えた。また、小池（1985）は「賢治にあった体験かどうかは知らないが」と前置きして、賢治がシグナル、つまり身分のよい「若さま」の立場にあった、と述べている。

それらの見解から、さらに一歩進めて、この物語が書かれる少し前の、賢治の具体的な恋愛を描いた作品としたのは澤口（2010,2011）である。澤口はこの物語を宮沢賢治と小学校教師大畠ヤス子との恋愛を物語化したものと考えた。

澤口の著書『宮澤賢治　愛の歌』(2010）では、第一部を賢治とヤス子との恋愛の叙述に充て、題を「シグナルの恋」とした。澤口は佐藤勝治(1981,1984）の見解を基に更に考察を加えて二人の恋愛の全体像を明らかにしようとし、多くの詩を分析した見解は説得力に富むものであった。

しかしながら、「シグナルとシグナレス」に関する澤口の解釈には多くの問題がある。

ひとつは、本線シグナルを賢治とし、軽便鉄道のシグナレスを大畠ヤス子としている点である。岩手軽便鉄道や花巻電鉄、花巻電気などの諸会社は相互に密接に結びついており、賢治の母方の宮沢家も父方の宮沢家も、ともにこれらの事業に深く関わっていた（深澤、2005)。したがって、賢治は岩手軽便鉄道側･シグナレス側の人間であり、東京と結びついた東北本線側・シグナル側には属していない。

次に、恋する二人を応援する立場をとる「倉庫の屋根」は賢治の父の政次郎を思わせる、と澤口はいう。しかし、その「倉庫の屋根」は二人の恋に口出しすることを「何の縁故で」口出しするのかと咎められた時に「おれは縁故と云へば大縁故さ、縁故でないと云へば、一向縁故でも何でもないぜ」と答えている。実の親子でありながら、こんなことを言うはずはない。したがって、「倉庫の屋根」のモデルは父政次郎ではない。

澤口は二人の結婚に反対する「鉄道長」が誰を指すかも推定できず、ただ「近親者」とのみ書いており、説得力に欠けている。

また、賢治は花巻の裕福な家の出身とはいって

も、商家の子息を「若さま」などと呼ぶことはないし、まして賢治自身が自分を「若さま」と呼ばれる存在として登場させることはありえないであろう。

この作品を賢治とヤス子の恋の顛末をそのまま童話にしたようなものと澤口は書いているが、事実と合致しない点が多い上、長い間ごくわずかの人々しか知らなかった秘められた恋を、賢治自身がわざわざ新聞紙上に自ら公表する筈はない。賢治は詩あるいは心象スケッチには彼自身の姿をかなり率直に描写させている。しかし、散文の場合は、学校教師として、もしくは「私」として登場させる場合以外には、賢治自身を描き込んだ例はほとんどない。

シグナルとシグナレスとは互いに近づくこともできない純愛であるが、賢治とヤス子の恋は澤口も描いているように極めて親密で、二人で泊りがけの旅さえしたらしいのである。

したがって、どの視点から見ても、この「シグナルとシグナレス」に賢治とヤス子の恋を当てはめるのは無理である。しかし、ヤス子との恋に敗れた賢治が、次節以下で述べる信子との恋が実らなかった有島武郎を思い浮かべたことはありうるであろう。

(2) 有島武郎がシグナルのモデルであった

「若さま」ことシグナルのモデルは作家有島武郎である。有島武郎[2)]は、旧鹿児島藩の下級武士であった有島家の出である。父有島武は、大蔵省の高級官僚として栄達し、実業家に転じても成功し、上流社会の一員となった。その有島武の長男として有島武郎は1878（明治11）年7月、東京に生まれた。

彼は当時栄進を極めつつあった有島武の長男として学習院中等科に学び、皇太子（のちの大正天皇）の御学友に選ばれるという、まさに貴族的環境のもと「若さま」として育ったのである。

有島武郎はのちに妻安子を娶るが、その実家神尾家はのちに男爵位を授かっている。武郎の弟、有島壬生馬（みぶま）は原田男爵家の令嬢と華族会館で盛大な披露宴を行なった。武郎自身も学習院の校友や白樺派のメンバーの華族たちとの交流が深く、また軽井沢では、別荘の持ち主同士の交流の中で華族、たとえば近衛文麿公爵との交友もあり、華族たちを中心とした上流社会に加わっていた。おそらく有島家も長男武郎の心中という事件がなければ授爵家となったであろう。

有島武郎たちの母幸子の実家は旧盛岡藩士の山内家で、同じく旧盛岡藩士の家柄の新渡戸稲造とは親戚であった。山内家は幕末においては江戸城留守居役を勤めた家柄である。母幸子も結婚前、城に出仕しており、花巻城詰め盛岡藩士（いわゆる花巻侍）の嫁で佐藤昌介ら兄妹の母の旧姓鹿討きんと同僚であった。

有島武郎の弟、有島壬生馬は生馬（いくま）の筆名で画家、文筆家となり、同じく山内英夫は里見弴（さとみとん）の筆名の小説家で、盛岡の母方山内家を継いでおり、有島三兄弟として知られる。

兄弟のうち山内英夫だけが盛岡市の先人記念館に郷土の誇る先人の一人として顕賞されている。

しかし当時の岩手の人々には三兄弟とも旧盛岡藩ゆかりの有名人として知られていた。有島武郎も母方の縁でいわゆる花巻侍も含めて旧盛岡藩南部家家臣と親しく交流し、彼が札幌農学校へ進学したのも、旧盛岡藩士の出であり親族でもある新渡戸稲造を敬慕したためである。

したがって、有島武郎は花巻人としての宮沢賢治にとっても強い関心を抱いた人物であった。もちろん、賢治は作家として、またリベラリストとしての武郎にも注目していたのである。

また、1922（大正11）8月、有島武郎が行った狩太有島農場の解放は、当時、労農運動に理解を示し、農地解放を理想としていた賢治には共感する事例であり、有島武郎の属する白樺派の文化活動も、のちに羅須地人協会を創った賢治にとって一つの參考例であった。

しかしその反面、有島武郎にはその人間的な弱さから引き起こした多くの挫折やスキャンダルがあった。このように有島武郎は賢治作品のモデルとなる多くの要素を持っていたのである。

2. シグナレスのモデルは河野信子だった

(1) 河野信子は新渡戸稲造の姪だった

有島武郎は母が盛岡藩士の娘である縁で札幌農学校の新渡戸稲造を頼り、1896年同校予科5年に編入学、1901年に本科を卒業したが、編入学当初は新渡戸の家に寄留したほど親しい仲であった。

その新渡戸宅で、武郎はシグナレスのモデルと考えられる河野信子に出会ったのである。彼女は新渡戸稲造の姉喜佐（象子）の娘であり、有島武郎が札幌農学校に編入学し、新渡戸家に寄留していた1896（明治29）年頃、まだ信子は14歳であったが、二人は互いに知り合い、好意を持ったのである。

新渡戸家は幕末から明治初年にかけて苦難の連続であり、喜佐の嫁いだ河野家も当時は父親が亡くなり、喜佐が産婆として働く母子家庭になっていた。後述する有島武郎の自伝的小説『星座』には河野母子をモデルにした三隅母子が登場するが、その家庭環境も、ほとんど河野家と同じに描かれている。

当時、新渡戸稲造は過労や実子の病没のために、重度の神経症を患い、1897（明治30）年には札幌農学校を退官、メアリー夫人とともに米国、カリフォルニアで静養中であり、河野家を支えることができない状況であった。

ちなみに物語の中でシグナレスが「今朝は伯母さんたちもきつとこつちの方を見てゐらつしやるわ。」と呟くのは新渡戸稲造夫人メアリーを指すのではないだろうか。

なお、当時小学生だった信子の弟孝夫は、のち稲造夫妻の養子となり、ハーヴァード大学に留学、帰国後はJapan Times紙の編集長などを勤めている。

(2) 武郎と信子は恋をした

札幌農学校本科を卒業した武郎は新渡戸稲造の勧めにより米国のヴァーフォードカレッジ大学院、およびハーヴァード大学大学院に留学し、3年間の滞米生活と帰途の訪欧旅行を経て、1907（明治40）年4月に帰国した。

米国からの帰途に寄ったスイスの白鳥ホテルの娘であるマティルデ・ヘックに宛てた1907年7月18日付けの手紙に次の文がある（『有島武郎全集　第13巻』[3]。原文は英語、同巻の和訳を掲げる）。

> アメリカに行く前に、一人の少女を知っていましたが、気の毒な境遇だったので、僕は同情していました。彼女は天真爛漫で、若く、僕は悲惨な苦しみから彼女と母親を救うためにあらん限りの努力をしました。（後略）

さらに帰国後の武郎は、信子が多くの縁談を断り、25歳という、当時としては結婚適齢期を過ぎた歳まで、独身のまま武郎の帰国を待っていたことを知ったが、彼女からの愛の告白を一度は断った、と手紙に書いている。

しかし、その後、信子への想いに気づき、一転して彼女との結婚を願い、父親にその意を伝えた。その時、新渡戸稲造の親友でのちに植物学の泰斗となった宮部金吾が二人を励まし、彼らの結婚を認めるよう武郎の父武に話したりしたが、武を説得することはできなかった。これらの行動から、宮部が物語の中の「倉庫の屋根」の役割を果たしていたとみるのが妥当なのである。

(3) 小説『星座』に武郎の恋を読む

「シグナルとシグナレス」の新聞掲載の前年、1922年5月に有島武郎は小説『星座』（第一巻）を叢文閣より有島武郎著作集第14輯として出版した。

賢治がこれを読んだ確証はないが、当時最も人気のあった作家の新作であったし、札幌農学校の生徒たちの物語で、しかも南部藩士の家の出である母を持つ作家であり、題名も賢治好みであるから、読んでいた可能性がきわめて高い。

この小説『星座』は有島武郎が、自身の札幌農学校生徒であった1899（明治32）年に同じ寮で暮らした友人たちと武郎との青年たちの一団を描

いている。武郎は「園」という姓の主人公であるが、ほかに二人の主人公とも言える友人がおり、さらに四人の個性的学生が登場し、彼らが星座に例えられている。この本の巻頭にはホイットマンの詩“Song of the Open Road”からの原文の引用がある。

“I do not want the constellations any nearer;
I know they are very well where they are;
I know they suffice for those who belong to them.”

シグナルとシグナレスが夢の中では空の海の渚に立つが、夢から醒めてみると元の所に居た、というのは、この詩の引用句の「星座がもっと近くにあって欲しいとは思わない」という箇所に対応しているようにも思える。

この小説『星座』の中のマドンナ的存在が三隅ぬいという娘であり、河野信子がモデルである。ぬいの父は地方銀行重役であったが早世した。母親は夫の死期が近づいたと知ったとき、急遽、産婆の資格をとり生業とし、貧民街に住んで働き、母子家庭の生活を支えていた。美しく純真なぬいは17歳になっており、園をはじめ学生たちの憧れであった。

小説『星座』第一巻の最後は、実際の有島武郎の場合と異なり、園の父親が亡くなり、帰郷する前に園は三隅親子に、ぬいと将来の約束をしたいと申し込む。しかし返事は、気持ちはありがたいが、返答は後に…、ということであった。

1922（大正11）年刊行のこの小説は実は三部構成の第一部であった。賢治の「シグナルとシグナレス」はその翌1923（大正12）年春に発表された。さらに初夏6月、有島武郎は波多野秋子と心中して世を去り、第二部以下は幻となった。

3. 家格の違い

(1) 恋の破局は両家の社会的地位の違いから

有島武郎が信子と結婚したい旨を申し出ると、父の武は有島家とは家格が違うから婚姻は認められないと厳しく拒否した。おそらく、貧しい産婆の娘と思ったのである。この噂は当時、花巻にも伝わったが、それが事実であることは武郎自身の言葉からも裏付けられる。『有島武郎全集　第13巻』によると前述のマティルデ・ヘックに宛てた1908年2月26日付けの手紙に次の文とその訳文がある。

> 僕を深く愛してくれていた娘と結婚させて欲しいと両親に頼んだことは前に書いたと思います。しかし両親は彼女の身分が僕たちほど高くないという理由で認めてくれませんでした。
>
> I asked my parents to have me married to a girl who had been rather attached to me. But my parents refused my request, under the excuse that her social standing is not as high as ours.

外国人には日本の家父長の権威はわかりにくいと感じたのか、両親の反対としているが、母親は盛岡藩ゆかりの人であり、武郎の願いに理解を示したかったと思われ、激越な拒否を言い渡したのは父親の武であったことは間違いない。

この時期に母有島幸子に宛てた武郎の手紙、たとえば同年5月13日の封書には、父親と武郎との確執の間に立つ母に対して「萬事の御心痛を負わしめ候事實に心苦しく」と記している。

なお、英文の手紙は、武郎没後間もなく刊行された有島武郎全集に、和訳とともに掲載されている。

(2)「鉄道長」有島武とはどんな人物か

武郎の父武（たけし）（1842—1916）は幕末に薩摩藩の郷士の家に生まれたが、1860年長崎や江戸へ遊学し、明治維新後の1876年、大蔵省に入省、薩長政府期待のエリートとして、ヨーロッパへ派遣されたのち、大蔵官僚として横浜税関長・関税局長・国債局長等の要職を歴任した。

1893年に退官し実業界に入り、多くの鉄道会

社や銀行等の取締役を勤めた。特に、日本鉄道会社の国有化にあたって大きな役割を果たした、いわば国鉄・東北本線を実現させた仕掛人の一人なのであった。したがって「鉄道長」として本線を支配する人物という設定に適合する。

武は、1895年11月に日本鉄道会社専務となり、1898年8月からは重役として理事委員、1899年2月に常務委員、1900年に常務取締役、と役名は定款の変更によって変わったが、1898年以降、国有化に至るまで、常に社長、副社長に次ぐ筆頭の取締役であった。武は若い頃、砲術や練兵、英語を学び、財務にも精通していたので、鉄道の技術、欧米の事情など鉄道事業に対する高い識見を有しており、国有化という新局面に適切な対応を行い得る重要な存在であった。

家庭にあっては、武は長男の武郎に対して厳しく、いわゆるスパルタ教育を行ったという。つまり、長男には家格に相応しい人間に育てたいと考えていたのであり、次男以下には甘かったという。

武郎（1918）自身の文によれば、「父は長男たる私には、殊に峻酷な教育をした。」と書いており、「今の普通の家庭では想像できない程頑固であった。」そうである。ここでの今とは大正時代であるから、平成の現在からみれば、さらに想像を絶するものであろう。

長男の結婚相手についても、彼の属する上流階級から選びたかったのであり、実際、のちにそれを実現させた。若い武郎には、父の家格の違いを理由とする拒否に抗すべくもなかったのである。

宮沢賢治が「シグナルとシグナレス」を国鉄東北本線と岩手軽便鉄道の合併運動を踏まえた作品としようとした時、ちょうど『星座』も読んだばかりであったろうから、彼は有島武郎と河野信子の恋のことを想い起したと考えられる。

なぜならば、当時、花巻の人々は郷土の誇りである新渡戸稲造とその周辺の人々についての風聞に詳しく、新渡戸稲造の姪を家柄が低いという理由で退けた有島武の言動に、強い反感を持っていたのであり、賢治もその一人であったに違いない。

4. 賢治作品と有島武郎

(1) 主な登場キャラクターのモデルは？

有島武郎と賢治の関係について取り上げたのは川原（1974）であったが、両者の作風の比較論にとどまり、直接的な影響については記していない。しかし、私（米地）は次のように武郎が賢治作品に影響を与えた例を見出している。

本稿で取り上げた「シグナルとシグナレス」の場合は、主な登場キャラクターのモデルが有島武郎とその周辺の人物なのである

シグナル＝有島武郎
シグナレス＝河野信子
鉄道長＝有島武
倉庫の屋根＝宮部金吾

しかし、「本線付きの電信柱」のみが該当者不明である。もともと、「本線付きの電信柱」は物語のなかで、最も矛盾に満ちた不自然な性格である。

シグナルを「若さま」と呼ぶ点では、シグナル一家に仕える若様のお目付け役の者のようであり、シグナルの後見人と称する点ではシグナルの保護者ないしは監督者のようであり、叔父が鉄道長だという点で言えば権力者一族である。

実際の有島親子の場合は、手紙や面談で互いの意志を伝えあっていたが、一箇所に立ったまま動けず、通信もできないシグナルにとっては、東京にいる鉄道長との連絡方法は電信に伝えてもらうという手段しかない。

そこで賢治は「本線付きの電信柱」という父有島武の耳となり、口ともなるキャラクターを加えたものと考えられる。なお、有島武は一人っ子であったから、父方には甥はいない。

まだ、軽便鉄道の国有化のめどが立たない時期であり、有島武郎と河野信子の愛も実らなかったので、前述の三番目の特異性、すなわち、物語は結びが曖昧で、恋の行方は不透明なまま終わるのである。

有島武郎は理想を追いながら果たせず、自らの

弱さを露呈しつつ生き、長男として父親の期待に応えられず、恋も貫かれなかった。その有島武郎の人生の翳の部分の一エピソードを、軽便鉄道国有化問題の停滞と重ね合わせて、結ばれぬ恋を描いたものが「シグナルとシグナレス」であった。

その中のシグナル・有島武郎に賢治は深い共感を抱いたのであろう。しかしその賢治にとっても、新聞掲載の最終回が載った1923年5月23日から僅か半月後の6月9日に有島武郎が波多野秋子と心中したことは予想外であったと思われる。

米地はこれまでに、これと同様に花巻と関わる事件を背景に、実在の人物を寓意したキャラクターを登場させている賢治作品を4編見出している。

すなわち「猫の事務所」（米地、2007）では、稗貫郡役所廃止問題をテーマに、時の内相・浜口雄幸（通称ライオン）を獅子として描き、「月夜のでんしんばしら」（米地、2013）では、盛岡の工兵隊などのシベリア出兵を題材に、当時の陸軍参謀総長・上原勇作を電気総長として登場させ、「飢餓陣営」（米地、2015）では同じく、青森の歩兵第五聯隊のシベリア・北サハリン出兵をテーマに町田経宇サガレン州派遣軍司令官をバナナン大将のモデルとしている。

(2)「黒ぶだう」も有島武郎と関わる

本稿で取り上げた「シグナルとシグナレス」の他に短編「黒ぶだう」においても、有島武郎はモデルとなっていると考えられる。

賢治の短編「黒ぶだう」[4]は、狐に誘われた仔牛のささやかな冒険の話である。 狐と仔牛は、留守中のベチュラ公爵別荘に入り込み、その二階の部屋にあった黒ブドウを食べる。狐はブドウのつゆを吸って、他は吐き出し、仔牛は種まで噛む。そこへ突然、公爵とその客のヘルバ伯爵とその娘が帰ってきたので、狐は素早く逃げるが、仔牛は残されてしまう。しかし盗み食いを咎められもせず、かえって伯爵の娘から黄色いリボンを貰う、というほのぼのとした小品である。

野生の狐はうまく逃げ、家畜の牛は残って人間との関係を深めるという話には、野生動物も家畜もそれぞれが生きてゆける世界が見られるのである。

この物語の舞台であるベチュラ公爵別荘のモデルは、1925年に建てられ花巻市御田屋小路に現存する洋館、菊池捍（きくちまもる）（1870―1944）邸である。

その証拠は「わき玄関」という武家屋敷などの特徴を持つ特異な洋風建築という点が、作中の公爵別荘と共通するなどがあるからである。

従来、この建物は1926年の完成とされていたが、実質的にはその前年にほぼ完工しており、1926年の正月を新しい家で迎えたことが、菊池捍の日記に記されているので1925年が完工年である。

賢治の「黒ぶだう」の舞台である別荘は、樺林すなわちシラカンバ（いわゆる白樺）林のなかにあるという設定であり、その主の名前がベチュラ公爵であるのは、シラカンバなどの属するカバノキ科（属名も）の学名 *betula* をとったものである。ベチュラ公爵のモデルは有島武郎をイメージしたと考えるのが妥当となる。

なぜならば、白樺派は芸術かぶれの華族の集団と世間では見られがちであったからである。

学習院の学生が作っていた三つの回覧雑誌の同人たちが合同して、1910年、雑誌『白樺』の創刊号が発行されたが、その回覧雑誌の中で先駆的であり、他の二誌を生む契機となった『望野』の同人は、武者小路実篤、志賀直哉、木下利玄、正親町公和の四名であり、志賀以外の三人は華族の出である。

そのため、たとえば『時事新報』における『白樺』創刊号の評には同人たちを「少壮華族の機関」と呼ぶなど、華族たちによる雑誌と見られがちであった。

賢治が『白樺』を手にしていたことは、盛岡高等農林卒業後の研究生ないし無職の時代の短歌に「ゴオホサイプレスの歌」（歌稿Aに四首、歌稿Bに二首）があり、1919年8月以降、翌年3月までの間に詠まれていることからわかる。

ゴッホは当時ゴオホとして、その作品を『白樺』

誌上に柳宗悦や有島武郎の弟有島生馬がたびたび紹介していた。1919年6月発行の『白樺』10巻6号にもゴオホ「杉（Le Cypres）」として油彩画の複製が載っており、賢治の「ゴオホサイプレスの歌」はこれに触発されたものであろう。

この賢治作品「黒ぶだう」には、有島武郎の童話「一房の葡萄」からの影響も考えられる。この童話は1920年に『赤い鳥』8月号に載り、1922年に彼の他の3編の童話とともに童話集『一房の葡萄』として叢文閣から出版され、まもなく教科書に掲載されたほど好評で、ひろく知られた作品であった。

主人公の「ぼく」が横浜の西洋人の教師ばかりの学校に通っていたころ、西洋人の友達ジムが持っていた美しい色の絵の具が欲しくてたまらず盗んでしまうが、それがばれて、二階の受け持ちの西洋人の若い女の先生の部屋へ連れていかれる。

しかし先生は、泣いている「ぼく」に、いやなことをしたとわかったならそれでいい、と話し、窓のそばの蔓から一房の葡萄をもぎとって、「ぼく」のひざに乗せてくれる。翌日、先生はジムと握手をさせ、また一房の葡萄を取り、二つに切って「ぼく」とジムに与える。

盗みが赦されたばかりか、先生は美しい白い手で一房の葡萄を「ぼく」に与えてくれたのである。先生の白い手の思い出は、「ぼく」にとっては初恋にも似た淡い思慕の対象でもあった。

有島武郎は学習院から札幌農学校予科に編入学したが、初等教育の前半はミッションスクール横浜英和学校に学んだ。その体験を基にしたこの作品には、罪を浄化する愛の手というキリスト教的な精神と、西洋人の多い横浜のエキゾチックな雰囲気とがあり、賢治には特に魅力的な作品であったろう。

掲載誌の『赤い鳥』については賢治の友人菊池武雄が賢治の童話を掲載してもらおうと、赤い鳥社の鈴木三重吉に原稿を見せたが断られたという有名な話がある。賢治は『赤い鳥』を創刊号以来読んでいたので、「一房の葡萄」も賢治好みの洋風の雰囲気の物語であることから、興味深く読んでいたと思われる。

管見によれば、従来、「一房の葡萄」と「黒ぶだう」との関係については、これまで中野（2009）以外には論じられていない。

この有島武郎の「一房の葡萄」と賢治の「黒ぶだう」は、ともにブドウがキイになっているばかりでなく、内容には対応する点が多く、「黒ぶだう」に対して「一房の葡萄」が影響を与えたという蓋然性は高い。要点を比較してみよう。

	「一房の葡萄」	「黒ぶだう」
盗みをした者	ぼく（小学生）	仔牛（ぼくと自称）
盗んだもの	絵の具	ブドウ
赦しの象徴	ブドウ	黄色いリボン
赦しを行う者	女の先生	女の子
赦しを行う所	二階の部屋	二階の部屋

また、「黒ぶだう」とは暗紫色すなわち葡萄色の栽培種を指し、ベチュラ公爵別荘のブドウであるから西洋種のものであろうし、「一房の葡萄」の場合も「西洋葡萄」「むらさき色の葡萄」とあり、ともに同じような品種のブドウの話である。

有島武郎の童話は数は少ないが、その作品にうかがわれる感性は賢治と共通するものが多い。また有島武郎自身が「子供の世界」という文で「子供をして子供の求めるものを得せしめる、それはやがておとなの世界にある新しいものを寄与するだらう」と述べている点は、賢治の作品にこめた思いに通ずるのである。

具体的な作品間の類似性がみられるものの例としては、有島の「ぼくの帽子のお話」と賢治の「さるのこしかけ」とがある。主人公の子どもが夢の中で上昇し、一転して下降に至り、夢から醒めるという物語という共通点がみられる。

また有島武郎がストリンドベルヒの作品を訳した「真夏の夢」は、聖ヨハネの祭の日に暗い所に住む貧しい母と小さな娘とが明るい「日の村」の方へ旅をする話で、六つの門を通り、「フォールド」へ出て、舟に乗り天国をはるかに望むところに達

する、という幻想的な物語である。

この「真夏の夢」との関連が考えられるのが、ケンタウル祭の夜、天上への旅をする「銀河鉄道の夜」である。聖ヨハネ祭は洗礼者ヨハネの祭日でイタリアでは聖ジョバンニ祭と呼ぶ。古来の冬至祭にクリスマスが宛てられたように、夏至祭に合わせたものである。

貧しいジョバンニが天空を旅する「銀河鉄道の夜」の祭の夜も、主人公の名からみてこの聖ジョバンニ祭と関わりがあると考えられる。「銀河鉄道の夜」の夢の中の旅に、この「真夏の夢」も投影されている可能性があるといえよう。

賢治は洗礼者ヨハネに関心をもち、三陸海岸の浄土ケ浜で詠んだ歌に「ヨハネのさまして」（ヨハネの様して）水辺に立つ人があり、「銀河鉄道の夜」の南十字でも「天の川の水をわたって」きて手をのばしてくる「神々しい白い着物の人」はヨハネと解し得る。

Ⅳ　天空の物語「シグナルとシグナレス」

1. 宮沢賢治の天空の物語とその背景

(1) 天文・宗教・音楽の調和を図る

宮沢賢治の「シグナルとシグナレス」は、「銀河鉄道の夜」と同じく、主人公が夢をみる話で、その夢で夜の天上すなわち星座の世界に行くという部分が、ともにロマンに満ちた幻想的な場面として、読者に強い印象を与える。

「シグナルとシグナレス」の場合は、主役の若い男女として擬人化されているシグナルたちが、互いに愛し合っているものの、まわりから邪魔されたり、監視されたりするが、夢では天上の世界で二人きりになれる、という話である。そのロマンチックな夢から醒めて物語は終わる。

天空に寄り添って立つ夢の世界に入るとき、二人の理解者である屋根は、一種の呪文「アルファー、ビーター、ガムマー、デルター」を唱えさせる。

ギリシャ文字のアルファベットの名前がなぜ、天上の夢をみる呪文になるのか、それは、星座の中で明るい順に星にこの文字（ビーターはベータの英語読み）が付けられているからで、これも有島武郎の『星座』を連想したためであろう。

その天上の世界での二人の会話にはピタゴラスの「天球の音楽」に触れた部分があり、その言葉の唐突さ、難解さにとまどいを感ずる読者が多いであろう。この「天球の音楽」はピタゴラスの神秘主義と、賢治の科学的思考および音楽への関心とから、賢治が創りあげた幻想と言える。

天文と音楽との組み合わせの賢治作品としては「双子の星」がある。これはピタゴラスの「天球の音楽」から「シグナルとシグナレス」や「銀河鉄道の夜」へ至る道程において書かれた童話で、この作品には賢治版「天球の音楽」ともいうべき「星めぐりの歌」も登場する。

(2) 島地大等に賢治は学んだ

賢治の父宮沢政次郎は敬虔な浄土真宗信者で、有志とともに花巻仏教会を組織し、彼が中心となって仏教夏期講習会を毎年開催していた。賢治も小学生のころから大沢温泉において泊まりがけで行われたこの講習会に家族とともに参加した。

賢治と島地大等との最初の出会いがいつであったかについては、小野（1979）の綿密な資料の分析がある。それによると、1911（明治 44）年、中学三年の 8 月にこの当時盛岡の浄土真宗願成寺の住職であった島地大等の話を仏教夏期講習会で聞き、同年 10 月に盛岡での報恩講で大等の法話を聴いたという。翌年秋、中学四年の賢治は父宛の手紙に「小生はすでに道を得候。歎異鈔の第一頁を以て小生の全信仰と致し候」と記している。境（1976）も賢治が中学三年生のとき、願成寺で開かれた仏教講話会で大等の法話を聞いた、としている。

賢治は 1915（大正 4）年の盛岡高等農林学校入学前後に、家にあった大等の著書『漢和対照妙法蓮華経』をたまたま見つけて読み、強い感動を受けたと言われている。同年の夏には大等の「歎異鈔法話」を聴き感銘したという。熱心な浄土真宗の信徒であった父政次郎の蔵書に法華経の書があるのは、政次郎の友人でともに仏教講習会に集っ

ていた高橋勘太郎が贈ったもの（小川、2005）であり、編著者が講習会の講師の一人であった島地大等であるから不思議ではない。この年の賢治の短歌の一つに「本堂の／高座に／説ける大等が…」と始まるものがあり、詳しくは後述する。

大等は大谷光瑞の率いる探検隊隊員としてインドの仏跡調査を行い、その後中国に立ち寄ったのち帰国したが、なかでもブッダが法華経を説いた霊鷲山[5]の場所を調査し比定した折のメンバーでもあったことも賢治に強い印象を与えたであろう。

青年期以降、賢治は国柱会に傾倒し、日蓮が開き田中智学が導く法華信仰の道へとひた走る。それは大等から賢治が離れていったことを意味する、という論者も多く、たとえば小野（1979）はそのことを明確に主張した。すなわち、1916（大正5）年4月に賢治は大等に会い、それ以後、彼は「大等から遠ざかる」という。だが果たしてそうであろうか。

賢治の大等からの離反を述べながらも、なお小野は《賢治は決して「本仏」の語をしなかった。》と指摘し、智学の「本仏」すなわち絶対的実在（としての仏）を賢治はとらず、むしろ大等の教訓が、長期的には賢治を支配した、と述べている。小野のこの考えが、即、大等の「本覚」を賢治が採ったということにはならないが、小野は「賢治が本仏観念に抵抗したことは、大等の本覚観念の影響ないし刺激と見ることができる」と言い、「その底には賢治自身の自己理解としての修羅観念が根深く横たわっていたためでなかろうか。」と続ける。

筆者は、賢治が大等に対して尊敬の念を終生もち続け、大等から学んだものを最後まで作品に反映させようとしていた、と考える。小野は、《賢治が大等から受けた最も大きな教訓は「自己を見詰めよ」ということであったに違いない。そして賢治の全生涯にわたって大等の感化は、その働きをやめなかったのだと私は思う。》とも言っているからである。

次に大きな教訓は「世界を見詰めよ、宇宙を見詰めよ」ということであったに違いない。

農学校教師として賢治の同僚であった白藤慈秀は大等の弟子であるばかりでなく、浄土真宗本願寺派の布教使であり、大等が住職であった盛岡の願教寺の院代でもあって、大等との結び付きが深かった。この白藤慈秀は賢治の詩にも再三登場するが、その一つである「〔いま来た角に〕」の異稿には「引っぱりだこの島地大等高弟は／夜あけの汽車に間に会はうと／せっせとあるいてゐるかもしれん」とある。少し白藤教諭をからかったものであり、島地大等高弟という言い方も揶揄がある反面、賢治には白藤を羨む気持ちもあったとみられる。大等の深い思索、豊かな学殖、広い視野に魅せられていた賢治は、自身も島地大等の弟子と呼ばれたい、という意識をもち続けていたのである[6]。

信仰の面でも、賢治は臨終の折に、法華経一千部を印刷して知己友人に配るようにと遺言したというが、そのとき「本の表紙は赤に…」と言い添えたという。これは「赤い経巻」と賢治が呼んだ大等の『漢和対照妙法蓮華経』と同じ色にと指示したとみられ、それを聞いた父政次郎は『漢和対照妙法蓮華経』の和訳部分を翌年頒布したのである。

この際、父親の聞き間違いがあったのではないか、などという論者もいるが、賢治はある意味で国柱会の説くところを核としながらも、大等の導いたものを豊かな果肉として、受け取っていたことを示すものと考えたい。

なぜなら、賢治の豊饒な作品世界の創造は、大等から受けたものを土台にした営為であることがうかがわれ、死期の迫った病床でなお書き続けようとした「銀河鉄道の夜」にもその大等的な視点が読み取れるからである。

島地大等は法華経の重要性を深く認識していたのみならず、仏教の各宗派を偏見なく研究し、かつキリスト教など他の宗教にも客観的教学的な立場から理解していた。そのことがよく分かる文章は大等の『明治宗教史（基督教及佛教）』（1921）である。このような傑出した学僧が、そのころた

またま盛岡にいた、ということから、賢治との出会いが生まれた。近代日本における屈指の仏教研究者島地大等との奇跡的とも言える出会いが、同じく近代日本の希有な仏教文学者の宮沢賢治を生んだのである。

2.「シグナルとシグナレス」とピタゴラス、大等

(1) ピタゴラス派の天球運行の諧音とは何か

賢治の童話「シグナルとシグナレス」に不思議な会話がある。愛し合うシグナルとシグナレスが星の世界に二人だけでいる夢の中で、こう語り合う。

> 「波がやんだせいでせうかしら。何か音がしてゐますわ。」
> 「どんな音。」
> 「そら、夢の水車の軋りのやうな音。」
> 「あゝさうだ。あの音だ。ピタゴラス派の天球運行の諧音です。」

「ピタゴラス派の天球運行の諧音」などという語は、子どもばかりか、大人にも理解が困難であろう。

しかし、賢治にとっては、おそらくこの難しい言葉も、大等から聴いた少年のころから馴染んだぜひ使いたい言葉の一つであったのではないだろうか。

小野（1979）は、大等の人柄と関心を示すものとして池田和市の次の回想を紹介している。

> 其の夜一同で先生を案内して海岸を歩いた。夏といっても北海の波は可なりに高く、暗い海原の上に星羅が輝いてゐた。先生は杖の先きにて北極星を指示し、また天の川や何々星座など、天体の説明をせられた。無学の私は列の後ろにありて、唯不思議な尊さを感じつゝ天を仰いだ

この文で、小野は「この大等の関心からすれば（中略）、願教寺で賢治らにピタゴラスの天体論などを紹介したとしても不思議ではない。」と述べている。

(2)「天球の音楽」は軋る音らしい

宮沢賢治が一代の碩学・島地大等の謦咳に初めて触れた時、大等が語った法話のなかに、ピタゴラスの天体音楽論にまで話が及んだ、と小野（1979）は考えたのであった。小野は「賢治の思索年譜」として、1911（明治44）年から1924（大正13）年までを整理して掲げてあるがその最初の行はこう書かれている。

> 明治44（中3）島地大等を訪ねる。 大等の説教でピタゴラスの「天球の音楽」を知る。

賢治の思索の形成過程を辿る年譜の筆頭にこの一行があることは、誠に驚くべきことである。なぜなら重要な次の3点が読み取れるからである。

① 賢治の思索の原点は島地大等との出会い
② その時、賢治が聴いたのは仏教にとどまらず、ギリシャ哲学にも及ぶ説教
③ ピタゴラスの「天球の音楽」という賢治の好きな天文と音楽に関わる話

この1911（明治44）年に、賢治がピタゴラスの「天球の音楽」について島地大等から聴いた、ということは小野（1979）の推論ではあるが、彼は確信をもって断言している。

その確信の根拠は、賢治の1911年の短歌の一つ「軸棒はひとばんなきぬ凍りしそら／微光みなぎりピチとひゞいり」があり、賢治が大等によってピタゴラス派の天球観念を知っていた証拠になる、と小野は言う。さらにこの軸棒の歌の一つ前の歌の頭に「大等師の説教と水車小屋」というメモがあることも小野は傍証として指摘している。

板谷（1999）はこの中学四年生のとき、散策の途次、休息をとった水車小屋で半ば眠りながら夢うつつのなかで水車の車軸が軋る音を聞いて、天空にひび割れができたように感じ、短歌を作ったことを詳しく説明し、「シグナルとシグナレス」

にこの「水車の軋り」と「ピタゴラス派の天球運行の諧音」とがでてくるのは、賢治的、幻想感覚的なところ、と述べている。これは小野の考えと矛盾しない。

これに対して、このピタゴラスの話を賢治がどの機会に聴いたか不明、という立場の論者もおり、たとえば牧野（2006）はピタゴラスのこの宇宙観を何時どのように手に入れたのか、は今後の研究に待つと言い、恐らく1921年の上京中に発見したのではないか、と言う。こちらを採れば、賢治はその時、二十代半ばの青年である。

このどちらの見解が妥当であろうか。筆者は次の点にも着目しており、小野（1979）の大等から賢治がピタゴラス派の「天球の音楽」について学んだ、という考えを支持したい。それは賢治が盛岡高等農林学校に入学した1915（大正4）年に、次の短歌を詠んでいることと関連する[7]。

本堂の／高座に／説ける大等が
ひとみに映る／黄なる薄明

この歌の翌年に賢治は次の歌を詠んでいる。

こぜわしく鼻をうごかし西ぞらの
　黄の一つ目をいからして見ん
西ぞらの黄の一つめうらめしく
　われをながめてつとしずむなり

草下（1990）はこの黄の一つ目は金星であるといい、このような感覚は十代の少年のものとは思えない異様なものと述べ、この歌に古代の人々の眼を発見して驚嘆させられる、と記している。小川（2003）もこの草下の文を受けて、賢治と金星との交感、「賢治と金星との間に少しの隙間もない、一体的な感応が存在していた。」と言う。

この感覚、感応を中学生の賢治が自ら感じていた、として草下も小川も大いに驚いているが、私はこれを賢治は大等から学んだものであると考える。

なぜなら、大等が小野（1979）の述べたようにピタゴラスの「天球の音楽」について賢治らに語った、とすれば、ある人には金星などの惑星と交感できる、と賢治は思い、そして自分もその一人であると信じて、これらの歌を詠んだとしても不思議ではない。

ピタゴラスの「天球の音楽」とは、太陽と月と当時知られていた五つの惑星との計七つの天体が、それぞれ回転しながら固有の音を発し、それらが全体として和音となり、音楽を奏でる、というものである。これは普通の人には聴くことができないが、ピタゴラスのような特別な人間が聴き得るという。

中学生の賢治は、彼自身もまたそうであると感じたと思われる。「天球の音楽」を語る大等の瞳は薄明に映えて黄色ないしは黄金色に輝いていたが、その黄～黄金色に輝く瞳が天上に金星として現れ、賢治はこれと交信を行う幻想を抱いたのである。

ピタゴラスの「天球の音楽」はそれぞれの惑星がその自転によって発する軋みが、音楽になるという発想であるが、賢治は恒星の輝く天蓋が地軸を中心に回転するように見えるのも、軋みを発すると考えていたらしい。

「銀河鉄道の夜」を英語に翻訳したパルバース（1996）は「星めぐり」を“the rotating stars”と訳した。水車が回転するように星が rotate すると賢治は考えていたのである。

「銀河鉄道の夜」は未刊のまま残された作品で、賢治没後に残された原稿を、さまざまに加除したり、順序を考えたりして編集されており、現在は新校本全集のいわゆる後期稿として編纂したものが刊行され、定稿に近いと見なされている。しかし筆者は、この後期稿にも異論をとなえている（米地、2009）。

その後期稿では抹消されたが、ある時期まで末尾とされていた文には、地上に戻ったジョバンニの耳に、汽車の音が星めぐりの歌に聞こえたとあることは、実は極めて象徴的な意味がある。なぜならば、物語の中では銀河鉄道の音については書かれておらず[8]、ジョバンニやカムパネルラの口

笛の「星めぐりの歌」が響いていたのである。実はその口笛は銀河鉄道の音でもあったのである。つまり「星めぐりの歌」が銀河鉄道の車輪の回転の音なのであった。

したがって、次のような対応関係を賢治が考えていたと推定される。

「シグナルと…」 → 「銀河鉄道の夜」
水車の回転の音 → 汽車の車輪の回転の音
天球の音楽 → 「星めぐりの歌」
惑星の軋り → 恒星の輝く天蓋の軋り

すなわち、賢治の絶筆ともいうべき「銀河鉄道の夜」に、かつて島地大等から聴いた法話のなかのピタゴラス派の「天球の音楽」が形を変えて組み込まれていることが、考えられるのである。

なお、境（1968）も「シグナルとシグナレス」を星座と軽便鉄道という二つの一致点があるから、賢治の天体童話の系列として「銀河鉄道の夜」に連なる、としている。

この天空の音楽についても、有島武郎との関わりが考えられる。それは武郎の自伝的小説『星座』の冒頭近くにある札幌の有名な時計台の場面である。

武郎自身がモデルの札幌農学校学生の園が、この時計台に登り、定刻に鳴る鐘の音を聞く場面で、鐘を討つ時刻が迫ると歯車が軋り始め、時刻の数だけ鐘を討つと、やがて軋りが止む。園は厳粛さに打たれ、時間というものを見つめたと感ずるのである。

…今まで安らかに単調に秒を刻んでいた歯車は、きゅうに気息（いき）苦しそうにきしみ始めていた。と思う間もなく突然暗い物隅から細長い鉄製らしい棒が走りでて、眼の前の鐘を発矢（はっし）と打った。狭い機械室の中は響だけになった。園の身体は強い細かい空気の震動で四方から押さえつけられた。また打つ……また打つ……ちょうど十一。十一を打ちきるとあとにはまた歯車のきしむ音がしばらく続いて、それから元どおりな規則正しい音に還（かえ）った。

あまりの厳粛（げんしゅく）さに園はしばらく茫然（ぼうぜん）としていた。明治三十三年五月四日の午前十一時、――その時間は永劫（えいごう）の前にもなければ永劫の後にもない――が現われながら消えていく……園は時間というものをこれほどまじまじと見つめたことはなかった

シグナレスが「夢の水車の軋りのやうな音」といい、シグナルが「ピタゴラス派の天球運行の諧音」と説明する場面は、シグナルのモデル有島武郎の『星座』を想起して書かれたと想われる。

天空で二人が会う場面は、美しい星々の視覚的な描写で十分なのに、わざわざ理屈っぽいピタゴラス云々という会話が出てくるのも、やはりシグナルのモデルが有島武郎であることの一傍証であろう。

V　おわりに
―― 地上の葛藤と天上の祈りと ――

宮沢賢治の短編「シグナルとシグナレス」は、従来は童話と分類され、ともすると『機関車トーマス』のような子供向けの物語とみられていた。しかしながら、内容は大人向けであり、岩手の地元の新聞に掲載されて、読者には地域の話題を寓話化した大人向けの物語と受け止められる性格の作品であった。

その話題の一つは、私鉄である岩手軽便鉄道（ほぼ現 JR 釜石線）を国有化させ、国鉄（現 JR）東北本線に花巻駅で直接繋ぎたいという運動をモデルにしている。互いに愛しているが離れて立つ本線シグナルとシグナレス（岩手軽便鉄道）との恋とは、本線と軽便鉄道の双方の花巻駅が近接していながらも離れている当時の状況を描いている。

第二の寓意は有島武郎と新渡戸稲造の姪の河野信子との恋愛が、武郎の父の反対にあったことを素材にしている。父有島武は新政府の下で栄達したのち、民間企業に転じ、特に鉄道の国有化に大きな影響力を持っていた。彼は、産婆の娘信子を

身分違いとして結婚に反対し、新渡戸家の郷里花巻はじめ岩手の人々の怒りを買ったことを物語化している。

第三の寓意はピタゴラスの諧音の示す天空の妙なる調和である。葛藤や矛盾の多い地上の世界と異なり、天上には美しい和の調べがあり、それが天球の音楽として、恋人たちを感動させるのである。

これには島地大等の教えや有島武郎の自伝的小説『星座』からの影響を受けている。

すなわち、天：天球の音楽が示す美しい調和、地：地域社会の軽便鉄道国有化運動、人：有島武郎と河野信子の実らぬ恋、の天地人三つの寓意がこめられた作品である。

それは、宮沢賢治が宗教、科学、文学などの様々な分野に強い関心を持っていたことを示すとともに、彼の住む地域の発展への熱い願いを抱いていたことを表しているのである。

賢治作品にはテーマの重層性が見られるものが多いが、この作品は天地人の見事な三層構造を有し、その全てが有島武郎父子と関わっている、という鮮やかなものになっている。

花巻関連の話題を取り上げて作品にする宮沢賢治は、まさに「花巻という風土」の子であり、明治後期から大正を経て昭和初めに至る「鉄道の時代」の人であった。賢治は当時の花巻とその周辺のトポスを横糸に、彼の生きた時代を中心とするクロノスを縦糸とし、純な愛に結ばれたシグナルたちのロマンに満ちた天空の夢を図柄に取り入れて、美しいイーハトヴの愛すべき物語を織り上げたのである。

謝 辞

本研究にあたり、木村設計A･Tの木村清且氏、玉山香織氏、高橋恵美子氏、有島記念館、花巻商工会議所、花巻新渡戸記念館の各位、及川和男氏、熊谷誠氏はじめ、多くの方々のご教示ご協力を得ました。篤く御礼申し上げます。

【注】

1）日本鉄道会社とその国有化については次の資料を参照した。野田正穂ほか（編）『明治期鉄道資料（第二集）日本鉄道株式会社沿革史第二集』（1980、日本経済評論社）、中村建治『日本初の私鉄「日本鉄道」の野望東北線物語』（2011、交通新聞社）、松本乗昌（編）『図説　日本鉄道の歴史』（2010、河出書房新社）、日本国有鉄道仙台駐在理事室（編）『ものがたり東北本線史』（1971、同室）

2）有島武郎とその兄弟に関しては主に次の文を参照した。瀬沼茂樹（1970a、1970b、1972）、遠藤祐編（1994）、栗田廣美（1994）、有島武郎（1998）、宮野光男（1982）、宮越勉（1981）

3）『有島武郎全集　第13巻』、（1984、筑摩書房）、このほか、この件については、『有島武郎全集　第11巻』、（1982、筑摩書房）所収の有島武郎の日記「觀想録」にも間接的ながら、この経緯に触れた部分がある。

4）これについての詳細は次の文献を参照されたい。米地文夫・木村清且「賢治寓話「黒ぶだう」の西洋館モデルとしての花巻･菊池捍邸の発見」『総合政策』8巻1号、29－44頁（2006）、米地文夫･土井時久･木村清且「岩手に北海道を重ねた賢治寓話「黒ぶだう」の世界―菊池捍と佐藤昌介をめぐって―」『総合政策』8巻1号、45－62頁（2006）、米地文夫「イーハトーブ（建物）学　花巻・菊池捍邸と賢治寓話「黒ぶだう」」『宮沢賢治学会会報』35号（2007）、鎌田雅夫「花巻ゆかりの人物（5）菊池捍」『花巻史談』11号18－35頁（1986）、佐藤昭孝『花巻の文化を高めた先人・百七十人（第二編）』（2002）などを参照した。
なお、米地・土井・木村（2006）論文ではベチュラ公爵のモデルは、建て主の菊池捍のほか、有島武郎か武者小路実篤か、と断定を保留したが、本論文では有島武郎と断定している。また中野隆之「［宮沢賢治の葡萄の物語］」『黒葡萄』26号、1－19頁（2009）、は「黒ぶだう」の葡萄は二房、「一房の葡萄」は一房、という違いに着目した点など、刮目すべき指摘をしている。

5）インドにあったマガダ国の王舎城の東方にあり、法華経の如来寿量品第十六には、「於阿僧祇劫　常在霊鷲山」云々とある。

6）なお、宮沢賢治とは直接の関係はないが、島地大等と関連する人物に、浄土真宗の僧侶で、チベット仏教を現地で長期に滞在して学び、チベットの最高位の僧位を受けたチベット学者多田等観がいる。後年、賢治の没後ではあったが、花巻の寺に疎開して住み、高村光太郎とも親交を持った。等観は大等を師（ラマ）と仰いで崇敬し（ということは法主となった大谷光瑞をも超える存在ということである）、大等の教えとチベット行への推挙に深く感謝している（多田、1940）。花巻市博物館には等観が集めた貴重なチベット招来品のコレクションがある。

7）この短歌は他の歌稿には「本堂の／高座に島地大等の／ひとみに映る／黄なる薄明」とある。
8）大角（2010）は「そのとき銀河鉄道の汽笛が鳴った」という魅力的な副題を付した「銀河鉄道の夜」を取り上げた著書を公にしているが、実は銀河鉄道は蒸気機関車に牽引されているのではなく、したがって汽笛を鳴らすはずはないのである。

【文献】

（注1、3および4に掲げたものは省略した）

有島武郎（1918）私の父と母、中央公論、大正7年2月号、作家の自伝63、日本図書センター（1998）所収
有島武郎（1922）星座　第一巻、叢文閣（星座の会発行（1988）『星座』を参照）
板谷栄城（1999）宮沢賢治の、短歌のような 幻想感覚を読み解く、日本放送出版協会
遠藤祐編（1994）新潮日本文学アルバム　有島武郎、新潮社
大角修（2010）「宮沢賢治」の誕生 そのとき銀河鉄道の汽笛が鳴った、中央公論新社
及川雅義（1983）花巻の歴史（下）、国書刊行会
小川達雄（2003）盛岡中学生 宮沢賢治、河出書房新社
小川達雄（2005）隣に居た天才 盛岡中学生宮沢賢治、河出書房新社
小倉豊文（1964）解説『セロ弾きのゴーシュ』、角川文庫
小野隆祥（1979）宮沢賢治の思索と信仰、泰流社
川原仁左衛門（1974）有島武郎と宮沢賢治、みちのくサロン、2、47-57
草下英明（1990）賢治文学と天体、続橋達雄編、宮沢賢治研究資料集成、日本図書センター、所収
熊谷章一（1968）花巻市史　第一巻近代篇、花巻市教育委員会
栗田廣美（1994）帰国直後の有島武郎（問題をどう見るか）、白梅学園短期大学紀要（人文・社会科学篇）、30、3-17
小池滋（1985）「シグナルとシグナレス」解説、小池編、鉄道諸国物語、223-225、弥生書房
境忠一（1968）評伝宮沢賢治、桜風社
境忠一（1976）賢治入信の問題（一）―島地大等体験をめぐって―、啄木と賢治、8、72-81
佐藤勝治（1981）黒髪長く瞳は茶色　賢治の恋人新発見、くりま、3、160-161
佐藤勝治（1984）宮沢賢治・青春の秘唱“冬のスケッチ”研究、十字屋書店
澤口たまみ（2010）宮澤賢治　愛のうた、盛岡出版コミュニティー
澤口たまみ（2011）宮澤賢治　きみにならびて野にたてば、重松・澤口・小松（著）、宮澤賢治　雨ニモマケズという祈り、104-123、新潮社
島地大等（1921）明治宗教史（基督教及佛教）、初出「解放」、明治宗教文学集（1）、筑摩書房、（1969）、373-390所収
瀬沼茂樹（1970a）有島武郎伝―札幌農学校時代、現代日本文学大系　35、377-391
瀬沼茂樹（1970b）有島武郎集解説、日本近代文学大系33、8-40
瀬沼茂樹（1972）有島武郎研究、右文書院
高橋世織（1986）軽便鉄道　賢治童話を解くキーワード、国文学　解釈と教材の研究、31-6、154
多田等観（1940）喇嘛、日本仏教の歴史と理念、明治書院、多田等観全文集（2007）、白水社、所収
続橋達雄（1957）「シグナルとシグナレス』攷、四次元、79、1-7
バルバース、R.（1996）英語で読む 銀河鉄道の夜、筑摩書房
深澤あかね（2005）近代化過程における地方都市商業者の関わり―岩手県花巻地方のインフラ整備を中心に―、東北大学大学院教育学研究科研究年報、54-1、215-240
牧野立雄（2006）恋愛と音楽「シグナルとシグナレス」覚書、国文学 解釈と鑑賞、71-9、163-167
宮越勉（1981）初期「白樺」の有島生馬と里見弴、明治大学人文科学研究所紀要、59、181-214
宮野光男（1982）有島武郎の日記、有島武郎全集月報11、3-7、筑摩書房
八木英三（1951）稗貫風土記　第一巻人物篇、八木英三
八木英三（1955）花巻町政史稿―花巻市制記念、花巻郷土史研究会
米地文夫（2009）「銀河鉄道の夜」六分割論、―「楽しき先駆形」と「ありうべかりし第5次稿」の識別―、宮沢賢治研究 Annual、19、157-168
米地文夫（2007）宮沢賢治「猫の事務所」と郡役所廃止―政治的世界・民族的世界・賢治の内面世界の重層性―、総合政策、9-1、17-34
米地文夫（2012）賢治メルヘンの街・花巻ガイドブック、花巻商工会議所
米地文夫（2013）宮沢賢治「月夜のでんしんばしら」とシベリア出兵―啄木短歌・「カルメン」・「戦争と平和」との関連を探る―、総合政策、14-2、133-147
米地文夫（2015）宮沢賢治の戯曲「飢餓陣営」に秘められた反戦と災害克服への地理的メッセージを探る、『季刊地理学』62、208-216

なお、賢治作品の引用は原則として『新校本　宮澤賢治全集　第12巻』に依った。

（2015年9月30日原稿提出）
（2015年11月26日受理）

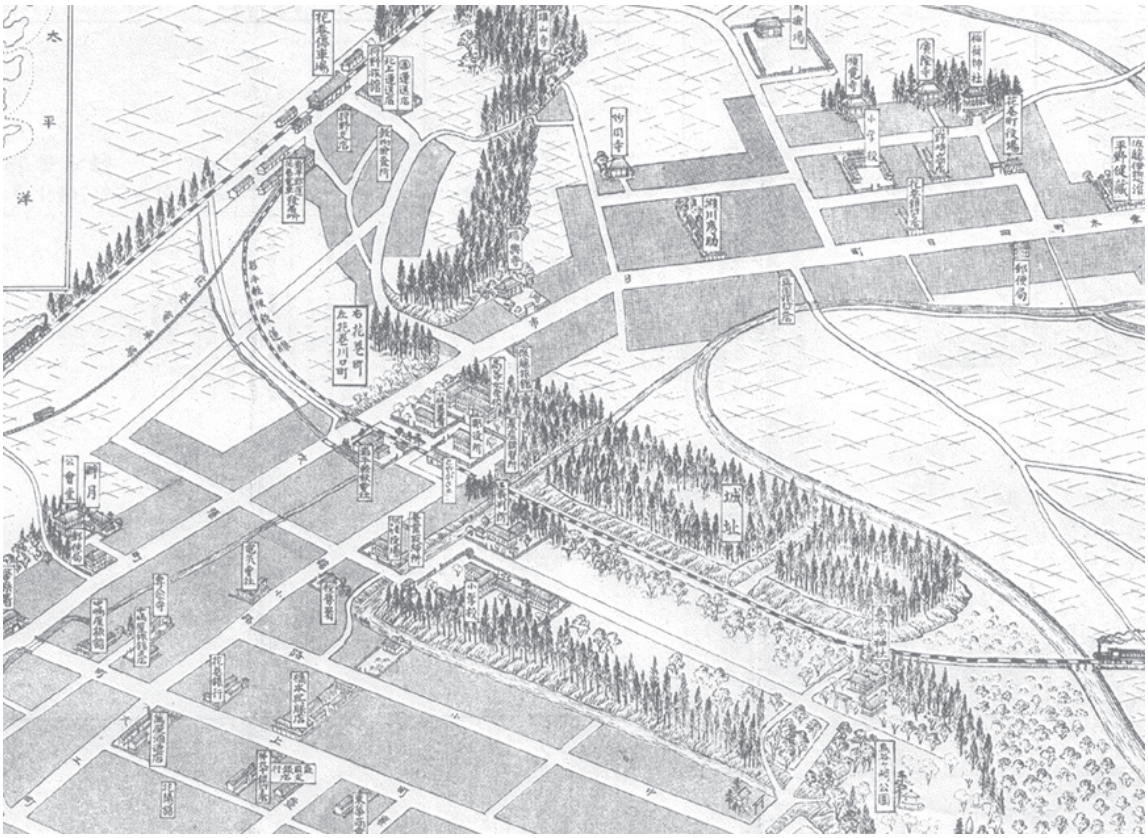

図 1　1920（大正 9）年の花巻駅付近

「巖手縣花巻町花巻川口町案内俯瞰圖（ 1920（大正 9）年東京図鑑社発行、花巻市博物館所蔵）の一部。右上が北になる。

花巻停車場は国鉄花巻駅、岩手鉄道・花巻電車発着場は岩手軽便鉄道花巻駅および花巻電気軌道花巻駅

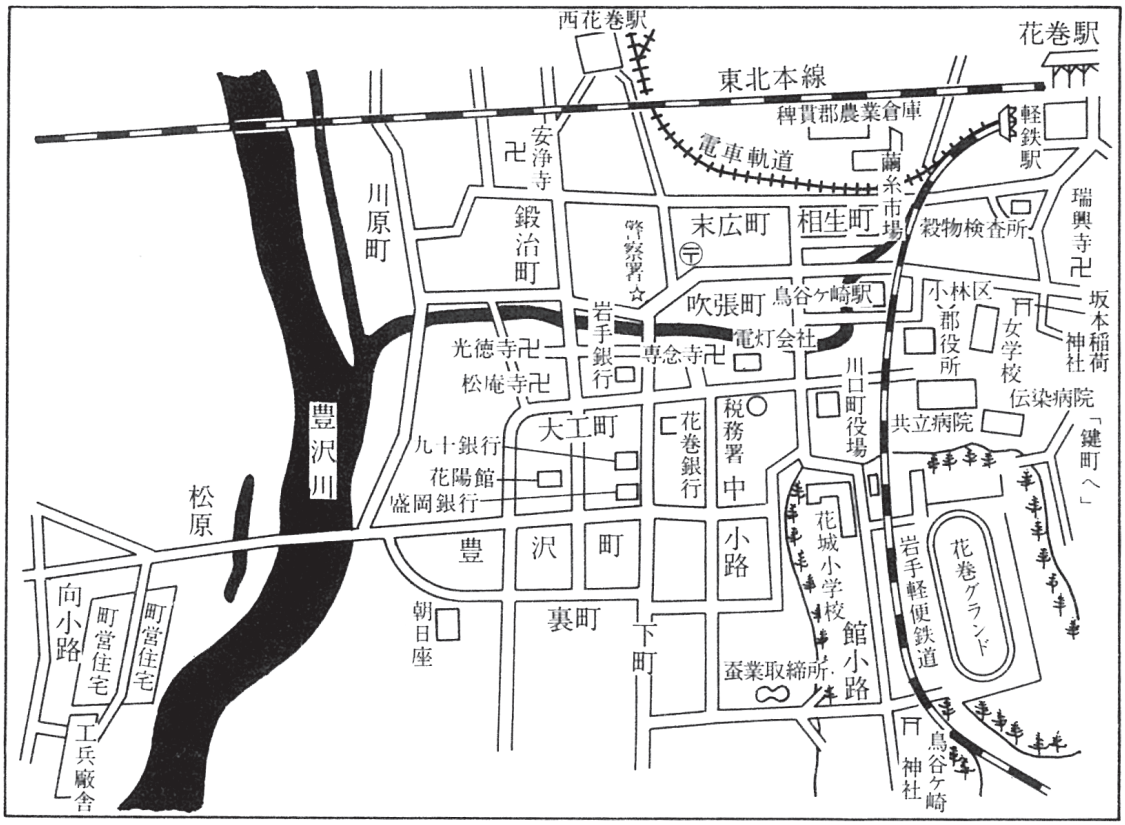

図 2　1925（大正 14）年の花巻川口町

及川雅義（1983）『花巻の歴史（下）』p.67 の図を転載した。
なお、この図の原図は「岩手県花巻両町案内俯瞰図」で、及川はその一部を用いている。
この図は西を上に描かれている。
国鉄と軽便鉄道の花巻駅の建物は北西隅、すなわち右上隅に描かれている。
図中の「花巻駅」は国鉄東北本線花巻駅、「軽便駅」は岩手軽便鉄道花巻駅。
宮沢賢治の家は、図中央やや下の「豊沢町」の沢の字の上方にあった。
また、当時、宮沢家の別邸が図の左下隅にあり、その後一時、羅須地人協会の建物となった。

Three Allegorical Implications of "Signal and Signal-less" by Kenji Miyazawa: The issue of nationalizing the Iwate Light Railway, Takeo Arishima's romance, and heavenly music

Fumio Yonechi

Abstract

"Signal and Signal-less," a short story by Kenji Miyazawa, has traditionally been considered a kind of fairy tale. However, it was actually an allegorical story for adults on issues of concern to the local community. One of the themes is about the romance of Signal-less (the Iwate Light Railway), which is separate from but in love with Signal, the main line. This theme stands for the effort to link the Iwate Light Railway (previously a private railway, most of which is currently the JR Kamaishi Line) to the Tohokuhonsen Line of the Japan National Railways Corporation (currently JR) by nationalizing the Iwate Light Railway. The second allegorical theme of the work is about the romance between Takeo Arishima and Nobuko Kono. In this story, Takeo Arishima loves Nobuko, Inazo Nitobe's niece. However, Takeo's father Takeshi Arishima, who was influential in nationalizing the railway, opposed his son's marriage to Nobuko, the daughter of a midwife, because she was born into a different social class. This provoked the people of Hanamaki, the hometown of the Nitobe family. The third allegorical theme is about the dulcet tones of the spheres represented by Pythagorean tuning. Unlike Earth, which is filled with conflict and contradictions, Heaven produces a sweet harmony that melts the hearts of lovers. In other words, "Signal and Signal-less" is a work on three allegorical levels: Heaven for the dulcet tones of heavenly music, Earth for the efforts of a local community to nationalize the light railway, and people for the romance between Takeo Arishima and Nobuko Kono, which came to nothing.

Keywords

Kenji Miyazawa's "Signal and Signal-less," Iwate Light Railway, Tohokuhonsen, Takeo Arishima, Pythagorean Music of the Spheres